

運慶一門による興福寺北円堂再興造営について—造形とその理念を中心として—

富岡 采花（京都大学）

治承四年（1180）、平重衡による南都焼討に伴って全焼した興福寺北円堂安置群像は、承元二年（1208）から建暦二年（1212）にかけて運慶一門によって再興された。中尊弥勒如来坐像と無著・世親菩薩立像が現存し、近年では南円堂に伝来した四天王立像を北円堂旧在像とみなす説が有力視されている。本群像に関しては、仏師運慶の作風検討を中心に、諸先学によって多岐に渡り仔細に論じられてきたものの、南都復興という文脈から本群像の造形を検討した論考は少ない。よって、本発表では、再興当時の興福寺僧が有していた仏法滅尽に対する危機意識や宋代美術を絶対的規範とはみなさない態度、祖師崇拜の高まりといった思想的背景に着目し、本群像に指摘される古典復古的要素および宋風要素が仏法の始原への回帰を意味する造形であることを述べる。そして、全てが運慶の創意工夫によるものとして従来捉えられてきた本群像の造形や主題構想に対し、興福寺寺家側の関与があった可能性を考慮すべきことを指摘する。

具体的にはまず、『興福寺僧綱等北円堂勸進状』や『猪隈関白記』といった諸史料から再興造営の様相についてまとめる。その上で、先行研究にある指摘を踏まえ、北円堂造営においては信円を筆頭とした興福寺寺家側の関与が強力なものであったことを確認する。

次に、運慶作であることが確実視される弥勒如来坐像と無著・世親菩薩立像の造形を仔細に検討し、共通して古典復古的要素を基調としながら、像に生身性を付与する手段として部分的に宋風要素が取り入れられていることを指摘する。そして、このような造形志向が当時の寺家が有していた仏法の始原へと回帰しようとする思想と正しく一致することを述べる。すなわち、当時の興福寺には覚憲『三国伝灯記』に説かれるような仏法滅尽に対する危機意識があり、同時に認められる祖師崇拜の高まりや宋代美術を絶対的規範とはみなさない態度に着目すれば、仏法を回復する手段として選択されたのが時間的・空間的に仏法の始原へと近付こうとする古典復古と部分的な宋風受容であったと考えられるのである。

以上を踏まえ、本発表の最後に、これまで運慶によるものと考えられてきた北円堂像の造形および主題構想に関し、寺家側の関与があった可能性を検討する。具体的には、北円堂再興造営において主導的役割を担ったと思しき信円が禅定院院主を務めた元興寺の金堂諸尊像と北円堂像の尊像構成が類似すること、近年、北円堂旧在説が有力視されている四天王立像に特徴的な図像が、鎌倉時代においては信円や貞慶周辺の関連遺品に集中して認められることを確認する。以上の考察から、北円堂造像において運慶は、信円ら興福寺寺家が有していた仏法の始原へと回帰しようとする思想を十分に理解した上で、それを巧みな彫技によって実在的な聖なる彫像へと昇華させたと結論づける。